

ヘンリー・ジェイムズの *The Turn of the Screw* に於ける渾沌の状況

小 野 和 人

The Inner Chaotic Situation in Henry James's *Turn of the Screw*
KAZUTO ONO

(一)

The Turn of the Screw はジェイムズの作品中最も巧妙なものである。諸家による種々の推測や臆測にも拘らず、作者の意図の真相がしかとはつかめないように出来ているからである。作品の梗概は次の様である。場所はイギリス田園地方サセックス・ブライという屋敷にgoverness(女家庭教師)が雇われてやってくる。教育を受ける二人の子供は孤児で、ロンドンにいる叔父が彼等の後見人になっている。この叔父が家庭教師に示した契約条件が変わっていて、屋敷中に如何なるトラブルが起っても、家庭教師の力で処理し、一切報告は無用というのである。二人の子のうち年上のマイルズは、何か訳の分らない理由で幼年学校から退学させられる。その理由を詮索することは、屋敷の若主人であるマイルズの名譽を傷つけるという理由で中止される。やがて家庭教師は二人の人影の出現に悩まされるようになる。女中頭のグロース夫人の判断によると、人影は屋敷に勤めていた元下男のピーター・クイントと前任の女家庭教師ジェッスルの亡霊であるらしい。家庭教師は二人の亡霊が子供達に何か悪影響を与え、墮落に導いていると思い込む。亡霊は家庭教師にははっきりと見えた。しかしグロース夫人はじめ家敷の使用人達には見えない、子供達には見えているのかどうか分らない。家庭教師は必死に子供達を亡霊から守ろうとする、と同時に自分の推測が正しいことを皆に証明しようとする。結末で家庭教師が子供達に亡霊のことを指摘したとき、年下の子フロラは精神錯乱をおこし、マイルズの方はショック死する。子供達のショックとは、単に亡霊のことを聞いて生じた恐怖かも知れない。あるいは、既に子供達は亡霊と霊的交流を行なっていて、それを家庭教師に見抜かれたためのショックとも考えられる。

ほぼ以上の様なことが読みとれるのみで、これにより作者の意図を探るのは容易ではない。容易でないのも無理はない。何故なら、明白な解釈を下せないようにすることが作者のねらいであったからである。ジェイムズの言葉に従えば、「読者が自分なりの『恐怖』を思い描けるように瞬味さを故意に意図した」のであった。(1) またジェイムズは、彼と同時代の批評家や作家たちが、この作品に対して特定の注釈をつけるのにも反対したのだった。この作品が読者に「恐怖」を与えることを意図したのは確かとしても、その恐怖は不定で、読者が各自の特質に基いて、自分自身で感じ取ってゆかねばならないものである。誰にとっても把握できる共通要素は、漠然とした恐怖の雰囲気のみである。作中の亡霊についても、家庭教師の見る幻覚とす

るE. Wilson の説、真の悪霊とするR. Heilman の説等の真向からの対立があり、いずれをよしとする定説もないまま、数多の疑問が発せられ、数多の解釈がなされてきた。疑問は作品に関してあると同時に、作者に対しても湧くのである。たとえば、読者の個性を生かそうとする試みは良いとして、そのとき、作者はどのような心境であったのだろうか。

(二)

くり返しになるが、*The Turn of the Screw*はわざと読者に分らせまいと工夫した点で、きわめてoriginalな作品である。1897年という制作時代を考えればなおのことそうである。出来映えや作品価値の問題は一応別として、それまで誰もが意識しては試みなかった実験的作品であることは確かである。ジェイムズ自身に新しい試みに向う気負いがあったようである。「この作品は読者との知恵比べである」(2)とも彼は述べているが、それはやはり、この作品を風変りな特殊なものにする意志の表明であった。それでは一体ジェイムズはあえて奇を求める必要があったのだろうか。ごく簡単にそれまでのジェイムズの経歴をふり返ることによって、この答を見い出してみたい。

中年に入り、作品の分類の上からも中期に入ったジェイムズは、一応、新旧両大陸の国際情況のテーマを書き尽し、この題材に飽いてくる。一方、彼の生活は、イタリア各地やパリでの滞在を経て、ロンドン定着へと固まってくる。作風はこれまでの風俗的な見方から、もっと深い社会的な見方のものへと変ってくる。バルザックを師として社会リアリズム小説を描こうとする。「ボストンの人々」、「カサマシマ公爵夫人」、「悲劇の美神」の三大社会長篇が生まれた。しかし、小説を高度の芸術品に磨き上げようとする審美の精神をもった作家にとって、社会リアリズムのみに徹することには体質的な無理があった。三大社会長篇はいずれも不評であったと言われている。続いて劇作の試みがなされた。ジェイムズはデリケートな心理劇を書いたが、ロンドンの観客の求めていたものは華やかな行動劇の方であった。上演の結果は手ひどい批評というより罵倒であった。ジェイムズのものはおだやか過ぎたのである。この後ジェイムズは自己内部の世界に立ち戻り、数年を置いて後期三部作を生み出すことになる。この三部作はやはり新旧両世界の国際情況を取り扱っているが、初期作品の時に比べて、新大陸アメリカ側の価値が積極的に開発されている。劇作が失敗に終って(1895年)、後期三部作が執筆され始めるまでの間(1899年)、この数年の期間、ジェイムズの心に混迷の状態が続いていたと考えられる。(3) この間、*The Turn of the Screw*を含めて十数篇の難解なよどんだような傾向をもつ中短篇が書かれたが、この頃ジェイムズはどうも人間も見失っていたらしい。相継ぐ社会小説、劇作の失敗のために人気を失ない、読者としての人間を理解できなくなっていた。と同時に、人間性一般についての判断にも自信を無くしていたようである。次元の低いことではあるにせよ、変った試みをするということ、奇を求めることがジェイムズにとって読者を回復する努力の一つであったとみることは出来る。ジェイムズは自分の作品の人気、不人気に相当敏感な人であった。当時の流行作家W. Jacobsに向って、臆面もなく、「私もあなたのような人気を持ちたいものです。」と言ってみたり、旅行カバンを記念品に贈られて、金ピカ

のスーツケースよりも人気の方が欲しいものだ、と手紙に書いたことが彼のエピソードになっている。(4) *The Turn of the Screw* が「読者との知恵比べの作品である」とジェイムズは言ったが、もつと露骨に、読者の人気を求めるために特に工夫された作品であると考えるのは自然であろう。

元来、幽霊小説、怪奇小説のたぐいは、ある程度散漫な構成が許されるものである。ある屋敷で不正な犯罪が行われる。怨念を抱いたまま人が死ぬ。死人が幽霊となって現れ屋敷の人々にたたる、悲劇が起きる、大体の構成はこの程度でよいのである。プロセスは大同小異でもよい。出来るだけものすごい幽霊妖怪が現れて読者を恐がらせればよい訳である。起った事柄に就ては、因縁とか怨念とか、ほんのわずかで済む原因結果の説明を述べれば、それで読者は納得するであろう。しかし、登場人物と事件に就ての描写はあっても、原因結果の説明を省くとすればどうであろうか。あるいは説明があるにせよ、登場人物の想像や推測だけに留めて、作者の確固とした説明を入れないままにしたらどうであろうか。読者は釈然としないであろう。しかし、因果関係の説明によるカタルシスをもたないために、恐怖の零囲気が高まるとともにその印象は流れ去らずに、いつまでも読者の心に残るかも知れない。つまりジェイムズの originality は、従来の幽霊小説のもつ因果関係のささいな説明を取り除く、と言って言い過ぎであれば、曖昧にするという思いつきから生じているのである。とはいえ、この小説は単に技巧や技法の問題のみでは片付かない。出来ればそれを編み出した作者の内面に逆上って検討がなされねばならない。

(三)

素直にこの小説を読んだ場合、家庭教師の言うことは正しく、彼女の必死の説得にも拘らず女中頭のグロース夫人は鈍感にも事態を認識し得ない。子供達は亡霊の及ぼす悪影響に汚染されてしまい、フローラは精神錯乱をおこし、マイルズは亡霊にとり殺されてしまう訳である。しかしただちに、家庭教師の述べたことには大して客観的な証拠がないことに気付く。彼女の会話の中では、根拠のない言葉の飛躍が所々にみられるのである。例えば、次の箇所はピーター・クイントの亡霊に関して、それが何をもくろんでいるのか、家庭教師 (G) とグロース夫人 (M) が話し合っている場面である。

M. "He (=apparition) was looking for someone else, you say — someone who was not you?"

G. "He was looking for little Miles." A portentous clearness now possessed me. "That's whom he was looking for."

M. "But how do you know?"

G. "I know, I know, I know!" my exaltation grew. "And you know, my dear!"(5)

亡霊が子供のマイルズを求めているのは確かだと言う、しかしその理由について家庭教師は何

の説明もしない。ただ、ひたすらに I know と繰り返すのみである。全く不可解な、飛躍した結論なのである。“And you know, my dear !”という言葉は、「グロースさん、あなたは屋敷の経験も長く、その事情に詳しい訳ですから、私の言わんとするところは、よく分るはずですよ。」という位の意味であろう。しかしグロース夫人は、自分が承知していることをわざわざ人に尋ねるような人ではない。家庭教師の完全な一人合点の箇所である。同じような例であるが、次は二人の子供が二人の亡霊と会っており、しかもそれを秘密にしているのだと家庭教師が確認する場面である。

“The four, depend upon it, perpetually meet. If on either of these last nights you had been with either child you'd clearly have understood. The more I've watched and waited the more I've felt that if there were nothing else to make it sure it would be made so by the systematic silence of each.” (6)

(あの四人は確かに、絶えず会っています。あなたも、最近一晩あの子達のどちらかと一緒に過していたなら、はっきり理解したことでしょう。私は見守っていればいるほど、待てば待つほど感じるのですが、もし他に何の証拠もないとしても、あの子達がどちらも、示し合わせて沈黙していることによって、確かにそう思われてくるのです。)

これも家庭教師の飛躍した考え方であり、子供達が亡霊について黙っていることは、むしろ彼等がそんなものと会ってはいないことを証明する、という逆の考え方も出来るのである。このようなことから、家庭教師は精神錯乱をおこしているのであり、亡霊は彼女の見る幻覚に過ぎないとする E. Wilson の説が生じている。(7) しかしこの説も、そうらしいという推察であって、絶対化するキメ手はないのである。一方、この作品の設定からみれば、物語は家庭教師の手記であり、それをダグラスという人物が皆に読んでかす形になっていて、ダグラスは家庭教師のことを、子供達を必死で救おうとした勇者として紹介する。R. Heilman はこれにキリスト教的解釈を加えて、亡霊を悪への誘惑者とし、家庭教師を誘惑からの救済者に見立てている。このように家庭教師の評価は、肯定否定の両極端にとり扱われているのである。いずれの評価が正しいかは別として、この極端な相異は何を意味するのであろうか。端的に言えばこれは人間評価の基準の喪失である。確固とした人間の価値が見失われている状況なのである。作者に戻して考えれば、ジェイムズが読者を見失っていたのと同時に、人間全体に就ても視野を閉ざされていた時期であるとする考え方によく照応する。ジェイムズがこの作品に於て ambiguous situation を作り出すために極度に技巧を凝らしたと同時に、又かなり正直に渾沌とした自己の内部を投影させたと考えることは別に矛盾するものでもない。人間の価値についての混迷をそのままうち出せば、作中人物についての評価の説明は当然出来なくなる。説明をしないことは、新しい技巧であるとともに、作者の内部に於ける不可避の状況でもあったとも考えられる。人間の価値について渾沌の状態にある作者が、無理をして、人工的に、何か価値らしいものを描き出してみせることも出来よう。しかし、又、正直に自己内部の渾沌をじっと見つめ見守ることも可能である。ジェイムズとしては後者の方を選んだように思われる。

人間の価値が分らなくなるとき、逆に、悪の基準もなくなってくる。亡霊達はジェームズの言葉によれば、餌食をあさって歩き、人間のたましいを蝕む者であり、「全くルールから外れたならず者でなくてはならない。」善なる亡霊や、既存の悪徳のルールに則った亡霊では迫力が無いと言うのである。ジェームズの選んだ亡霊は、作品の situation に邪悪の空気を満たすという恐ろしい任務を担っている。(8) 明確な行為の任務ではない。又、その任務の動機については、「どんな種類の悪と分類するはおろか、暗示さえ出来ない本質的な悪の動機で現れたものである。」と説明している。否、説明を拒否しているも同然である。このような悪は一般的、総合的な悪であり、極めて曖昧なものである。一般的悪であるから、明確、具体的な悪の行為を表現する訳にはゆかないのであり、atmosphere を通じて表現する他はないのである。ジェームズは亡霊を表す語として *ghost* という語を用いていない。その代りに、*apparition*, *visitant*, *visitor*, *spectre*, *dreadful kind* 等の表現を使っている。(9) 中でも *apparition* と *visitant* の二語が大部分である。元々 *apparition* は「現れ出るもの」であり、*visitant* は「訪れるもの」である。事実、この妖怪はいかにもそれにふさわしく、家庭教師のところを訪れ、姿を現すのみで、何も言わず、意味のある行為をしないままである。意味のある言動をとれば、それは何かの明確な悪の説明になってしまうからである。従って沈黙の零囲気があたりを蔽うことになる。

The place moreover, in the strangest way in the world, had on the instant and by the very fact of its appearance become a solitude. ... It was as if, while I took in, what I did take in, all the rest of the scene had been stricken with death. I can hear again, as I write, the intense hush in which the sounds of evening dropped. The rooks stopped cawing in the golden sky and the friendly hour lost for the unspeakable minute all its voice. (10)

(その上、全く不思議にも、その人影が現れたことによって、たちまちその場所はもの淋しい感じになった。……まるで、私が目に入ったその人影を眺めているうちに、その他の全景が死の気配を帯びたかのようなだった。これを書いている今も、夕方の物音が急に途絶えた、あのすさまじい沈黙が再びよみ返ってくる。みやまがらすは金色の空で鳴き声を止め、和やかなたそがれは、その言い様のない一瞬間、全ての物音を失ったのだった。)

まわりの全ての物音が絶えた瞬間、写真のネガを見るような不気味な静まりかえった光景がみられ、この中で亡霊が邪悪な視線を投げているのである。このような描写は数回繰り返されて行為とはならない漠とした悪の零囲気が示される。このような不定形の悪とは、言い代えれば、悪の基準の喪失の状態である。作者の心の中で、人間の価値基準が見失われるとともに、悪の表現も又、渾沌の状態に戻されているのである。

(四)

それでは、このような底知れぬ悪魔や悪霊を退治するにはどうすべきであろうか。悪霊に十字架をつきつけるとか、教会へ行行って悪魔払いの祈りをしてもらおうとかの、宗教による形式的

な方法に家庭教師は頼ろうとはしない。ある日曜日、屋敷の者達皆が晩の礼拝に出掛けるようにと家庭教師やグロース夫人が手配する。その直後、家庭教師は二回目の亡霊出現に出くわす。

There had been this evening, after the revelation that left me for an hour so prostrate — there had been for neither of us no attendance on any service but a little service of tears and vows, of prayers and promises, a climax to the series of mutual challenges and pledges that had straightway ensued on our retreating together to the schoolroom and shutting ourselves up there to have everything out. (11)

(その晩、私が知った事実のために一時間程意気そそうしていた後、私達は教会の礼拝にはゆかず、そのまま、まっすぐ、一緒に子供達用の勉強部屋へ引きさがり、私達だけで閉じこもって何もかものうちあけ話をしたのだった。涙と誓い、祈りと約束、ついには、おたがい協力して敢然と戦うことを固く誓い合って私達だけのプライベートな礼拝となったのだった。)

ここに於て、亡霊を信じ、その spiritual な力を恐れている家庭教師は、キリスト教会の救済の力や奇蹟の方は信じていない様子である。礼拝にゆくのは形式だけになってしまっている。礼拝にゆこうとしていても、亡霊が現れると、それを中止し、教会の力を借りず、ひたすら自分達だけの力で立ち向おうとする。それは自分達の力を確信しているからではない。教会の力が頼りにならないと感じられる以上、ぎりぎりの自分自身の力をもってあたねねばならないからに過ぎない。心の中で神に祈るにしても、それは orthodox なキリスト教会を通じた神の様にはみえない。祈りの対象である神も漠然とした渾沌の状況に包まれているのである。後に、家庭教師が子供のマイルズの手を引いて教会へ歩いていく場面がある。歩きながらマイルズは突然堰を切ったように日頃の不満を家庭教師に訴える。もう個人の家庭教師による勉強には飽いた、学校生活に戻りたい、もっと人生を知り、友人をつくりたいという巣立ちの意志である。家庭教師は少年が突然暴露した自我意識に驚く。と同時に、少年がこの要求を通すために、亡霊の出現で神経過敏になっており、教育者としての権威を弱くしている家庭教師の不利な立場につけ込もうとしている、と想像して慄然とする。これまでの、子供達を亡霊の悪影響から守り理想の教育をほどこす努力も無に帰したと思い込んで、家庭教師はすっかり動揺してしまう。もはや目的の教会での礼拝は中止し、屋敷に逃げ返ってしまうのである。ここでも教会は家庭教師の心の救済には一切なり得ていない。

(五)

家庭教師がこのようにキリスト教会に頼っていないにせよ、この作品には確かにキリスト教的なイメージは処々に見られる。家庭教師がブライの屋敷を、エデンの園を連想させるような楽園に見たてている箇所がある。(12) 又、誘惑(temptation)という語が使われており、(13) 各種の罪が提示されている。屋敷の元の下男と元の家庭教師、つまり亡霊同志の過去の“adultery”子供達が言っているとみなされる「うそ」と隠し事、マイルズがしてしまった「盗み」(家庭教師が出すはずの手紙を盗んで開封したこと)等である。Robert Heilman の解釈による

と、「ブライの屋敷はエデンの園であり、二人の子供は純真なアダムとイヴで、幽霊は死をもたらす誘惑者の蛇で、家庭教師は、『キリスト的連想を伴う救世主』であるとし、作品全体はエデンの園からの人間の墮落を語る宗教的寓意詩であると論ずる。(14)そしてこの Heilman の影響を受けて、Joseph Firebaugh も幽霊を象徴と見做し、「愛らしい子供は人間で、二人の幽霊は蛇であり、後見人の伯父は責任を負わぬ旧約の神で、家庭教師は無能な女司祭である」と解釈する。(15) Heilman と Firebaugh の解釈は、人間の運命の根源へ立ち戻って考えることから発している訳である。この二人の解釈を基にしつつ、時を現代に合わせて考えることも可能であろう。現代とはジェイムズ自身にとっての現代である。本来ジェイムズは歴史的、時間的な型ではなく、空間的な作家である。勿論、この様に割り切ってしまうことには問題がある。しかし彼が situation とか場、環境(milieu)等の語を良く用い、それらに彼のテーマを含ませる傾向を多く示していることを考えれば、一応は空間型という分類も成り立ち得る。とすれば、ジェイムズの心の混迷状態が彼をとりまく環境に投影されていると仮定することも出来る。環境とは、ジェイムズの居たイギリスであり、更に大きくとれば、旧世界ヨーロッパである。この作品が旧約の世界に於ける人間の運命の根源に触れているとすれば、そこから立ち戻って、彼の環境―彼の時代のヨーロッパの人々の運命をも反映していると考えられるのである。当時の19世紀末のヨーロッパは世界文明の中心に位置していた。産業革命が本当に実り、文明の利器が続々と誕生したのは19世紀後半であり、植民地政策と相俟って、ヨーロッパは繁栄を究めていたのである。しかしMatthew Arnoldのように、物質文明の繁栄の中に伝統文化の衰頹の徴候をすでに読みとっている人々も居た。ジェイムズの場合は、自身の内面の混迷や自信喪失が基調となって、まわりの環境を暗色に色づけて眺めることになったのかも知れない。亡霊は一般化して言えば、ヨーロッパの伝統文化の衰頹と崩壊を告げる悪夢ともとれよう。もしもブライの屋敷をヨーロッパという場の symbol と考えるならば、屋敷に住む主人公達はヨーロッパの各世代の人々を代表しているとみることも出来よう。女中頭のグロース夫人は、ヨーロッパの中老年の世代の代表者であり、古きよきヨーロッパという過去の思い出の中に生きていて、屋敷の危機をいくら説明されても実感をもって感じる事が出来なかったように、ヨーロッパの変革と衰頹を自覚することが出来なかったのである。家庭教師はヨーロッパを担っている世代である。その変革と衰頹を肌身で感じ、敢然とヨーロッパの伝統の危機に立ち向おうとする。しかし、その救済の方法は分らず、いたずらにもがきあがくことになる。家庭教師が危機に際して、キリスト教会には頼らず、何やら判然としない心中の神に祈ろうとするその姿は印象的である。キリスト教はヨーロッパの精神の根幹であり、それが今や全面的な信頼を寄せることの出来ないものになりつつある、という印象が家庭教師の態度から感じられるのである。子供のマイルズとフローラはヨーロッパの未来の世代であり、自分達是一向自覚していないが、ゆくゆくはヨーロッパの変革と衰頹の犠牲者となるべき運命にある。二人の子供が、男女の組み合わせであることは、確かにアダムとイヴを連想させるのであるが、これは神話におけるアダムとイヴに解釈されるとともに、ヨーロッパの将来を表す雛形としてのアダムとイ

ヴに受けとることも不可能ではなからう。結末に至ってフローラは精神錯乱をおこし、マイルズはショック死する。ヨーロッパの運命は、やがて第一次大戦により、物心両面にわたる多大な混乱と崩壊をこうむることになる訳である。勿論、このような analogy が偶然にもあてはまるだけであって、ジェームズがここまでヨーロッパの事情を見透し、ふまえてこの作品を描き各主人公にヨーロッパの世代を正確に対応させたというのではない。それはやはり荒唐無稽とってよからう。ただ、以上のような analogy が可能であるからには、ジェームズがこの作品を描くとき、少くとも、ヨーロッパの香しからぬ situation を無意識のうちに反映させた、ジェームズはヨーロッパのゆく末をそれと自覚せずに占ったのだと考え得るであろう。

(六)

作者ジェームズの心の中で、人間の価値が渾沌とした状態であり、人間の価値が見失われれば、悪の表現も又、渾沌とした底知れない状態になり、悪から人間を救い出す神の力も漠然とした頼りのないものになっていた。ジェームズの内面だけでなく、外面に於ても、つまりジェームズをとりまく環境であるヨーロッパも変革の時期を迎え、その従来の価値を見失いかけていた。それではジェームズは、世界の如何なる場所に新たな力と価値を見出し、人間性の何に信頼を回復すべきであったのだろうか。答は間近かであった。しかしジェームズはまだ早急な結論を下す積りはなかった。自己の心の中の世界と、自己をとりまく環境との渾沌状態を、じっくり見定めねばならなかった。この作品は、作者のこのようなつきつめた状況のもとに作り出されたものと私は考える。新しい価値を目指して作家の心が飛躍する前に、現状をしっかりと見定めるために、出来るだけ蹲らねばならない時期であった。心の内も外も閉ざされている作家が、自己のその現実を正直に披瀝すること、そしていかなるもっともらしい解決も示さないこと、これは確かに当時19世紀末に於ては新しい試みであったと言えよう。世紀末文学一般にみられた耽美主義による一時的解放にもジェームズは反応しなかったのである。一切の解決も解釈も拒否するという技法が、金もうけや読者確保の世間的野心から生まれていようとしつかえない。ただ、その技法に思い至ることは、作者の心の問題—価値の閉ざされた situation—がなければ果たして可能であったらうか。

次に作者の目は、ヨーロッパの衰頹から新世界アメリカの抬頭の方へ向けられることになった。『使者たち』ではストレザーによって新たな vision が描かれる。ヨーロッパの人がもっている文明の爛熟と人間の充実の要素が、新世界からの innocence と清楚さの要素に触れて調和し合い、人間が充実し生命に充ちあふれていると同時に清らかであればとストレザーは願う。この彼の vision は、ヴィオネ夫人とチャッドの現実のスキャンダルによって打破される。しかし価値を与えて呉れるのは、スキャンダルの現実ではなく、彼の vision、求めても得られないかも知れないが理想とすべき vision の方であるらしい。新世界の人は現実にといかかも知れないが、悪びれずに理想を描くことができたのである。『鳩の翼』に於て、ミリーの犠牲的献身の行為は、ヨーロッパの人々を墮落から救済することができた。『黄金の碗』では、やはりアメリカ女性のマギーが situation をリードし、円満な解決をもたらすことができたので

あった。vision から行為へ、後期三部作における新世界側の、確固とした光のさすような希望は、それ以前での地点における作者の混迷と模索と内省の時期なしには考えられないものである。

註

テキストは *The New York Edition of Henry James*, Vol. 12 を用いた。

- (1) Text, Preface, XXI
- (2) Edmund Wilson : *The Ambiguity of Henry James*, Ch. 2
- (3) 「ヘンリー・ジェイムズ研究」(北星堂) P.123
- (4) Michael Swan : *Henry James (Writers and Their Work*, Longmans) P.11, P.24
- (5) Text, P.194
- (6) Text, P.236
- (7) E. Wilson の功績は、この説によってジェイムズをアメリカ側にひき寄せた点にもあると思われる
- (8) Text, Preface, P., XX
- (9) 他の作品ではこれ程区別していない。ex. *The Ghostly Rental*
- (10) Text, P. 176
- (11) Ibid., P. 193
- (12) Text, P. P.173~4
- (13) Text, P.
- (14) Robert Heilman : *The Turn of the Screw as Poem (A Casebook on Henry James's "The Turn of the Screw")*
- (15) Joseph J. Firebaugh : *Inadequacy in Eden* (Ibid.)

(14)(15)とも、引用は「ヘンリー・ジェイムズ研究」(北星堂)の大津栄一郎氏のまとめを借用した
(昭和44年9月30日受理)